

ポストモダンにおける構想の方向性： 枯れかじけた荒野に向けて

半田智久 (学術 NGO・PLAOS/ 宮城大学大学院 事業構想学研究科) *

The orientation of the initiative in the postmodern : Toward the 'Kare-kajiketa' wasteland
Motohisa HANDA (Academic NGO: PLAOS / Miyagi University Graduate School of Project Design)

Abstract: In this paper, the orientation of the initiative is examined from the standpoint in the situation of the postmodern at present. Interpretations and evaluations for concept of the postmodern are various. But, it is possible to mainly categorize in two interpretations. The initiative told in each viewpoint is essentially different. By allocating light of the postmodern, the mode of our society initiative in the crossroad at the beginning of 21st. century is observed. One light is the light of grace which brought about the bright wealth in modern ages. The postmodern which emerges for the lighting is the modern residue. After modern age enlightenment, the light has quoted and referred to the glory in a past for the system and its management which the mankind has constructed. It illuminates the fancy world that took capriciously various things. By presenting the reality of the virtuality in the world as a representation, it was the work which intended to confirm the actuality in the vortex of the representation. The body as a being who exists in the daily corrugation, quarrels and smiles, pain and pleasure, searches the real existence, while the desire is manifested. The initiative described for the representation can be classified with the indirect initiative. Another light is the natural light irradiated to the different direction. It is the light of a good sense. It had shone, when we escaped from the magic in the Middle Ages and aimed at the future by considering in the brains of ourselves. The light illuminates the place beyond unfinished modern ages. It is postmodern in this meaning. The initiative which parts with modern ages and advances in the future society, is opened up by the intuition based on the enumeration through analysis and synthesize the indirect initiative. This is a part of the navigation map of direct initiative presented to initiators who stand at the site.

Key words: initiative (構想), concept (概念), postmodern (ポストモダン), indirect initiative (間接構想), direct initiative (直接構想)

はじめに

ポストモダンはそのことばを直にとれば、近代のあとの事態である。しかし、それほど素直な解釈を許さないのがこの概念をめぐる厄介な言説状況である。なによりもまず、文化還元主義の感触を色濃くしている哲学的思想あるいは美学的省察であるポストモダニズムと、資本主義の成熟によって到来した文明や社会のすがた、あるいはまだ見ぬ社会的な秩序類型としてのポストモダニティを分別するという立場 (Jameson,1984; Giddens,1990; McGuigan,1999) を尊重したい。そのうえでここでいうポストモダンとはその両者が重ね描きされる場所とする。

また、なにもをもってポストモダンというのかという問いにしても、モダンのはじまりが産業革命期であるとすれば、その革命の核となった工業のうち重工業中心の社会経済の駆動力が減衰して

*E-mail: handa@myu.ac.jp

いった脱工業化社会の到来 (Bell,1973) をもってすでにポストモダンに入ったとみることができし、産業界の変化よりも生活者の行動スタイルの変化をもってその消費行動が顕著に記号消費化しはじめたところから (Baudrillard,1970) 近代の価値観が根底から融解し別相のポストモダンに入り込んだという見方もできる。あるいはポストモダンということばは二重コードであり、政治経済の次元では後期あるいは晩期資本主義のただなかにあらわれた特性であつてモダンの一部、しかし建築や芸術、文化の側面ではモダンとは一線を画するあらたな様式として認めうとする Jameson (1984) のような見解もある。Eagleton (1996) の場合は、ほぼその前者の見方に沿い、体制や普遍、真実、自由、自律といった近代の象徴を否定するものの、同時に相対化して虚無的になることで結果的に現代はグローバル資本主義のなかに取り込まれている状況であるから、その意味ではモダンの行き着いた姿を語っているとす。Giddens (1990) も同様で、それゆえにポストモダンに入ったというよりも近代の帰結が徹底し、普遍化の度合いを強めたのであつて、ポストモダンというあらたな秩序があるとすれば現在の状況とは異なるこの先の彼方にあるとみる。その中庸をとる McGuigan (1999) はいまが歴史上、モダンからポストモダンの時代への過渡期であるとする。また、ポストモダンは反啓蒙の言い換えであり、いまだ近代は未完という点を強調してきたのは Habermas (1985) であつた。

徹底してこのことばを嫌う主張も少なくない。その典型は Rorty (1999) で、この概念は実際、多義的であるが統一性が見えてはつきりと失われているという点では通底していると皮肉り、ゆえにこの語は曖昧すぎて何かを伝える用をなさないと裁断する。ただ、そもそもポストモダンの特徴のひとつが本質論の否定であるから、当のポストモダンに対してその本質をめぐる問いかけが曖昧に結果することはその言説状況をもってしてポストモダン傾向の証左ともいいうる。

このようにこの概念は実に合意形成がとりにくいことを特性としているが、以下でこの多義的な概念を基盤にしてものを語る以上、本稿でのポストモダンのとらえ方を落ち着かせておく必要がある。ここではこのことばの意味するところを Jameson の二重コード説にやや寄り添って、つぎのふたつの異なる意味で用いる。ひとつは近代のプロセスを経てその歴史的な結果としてたどりついた状況という意味である。このとらえかたではポストモダンも大ぐくりのモダンのなかに組み込まれている。近代に信じられていたものごと、価値や意義はことごとく揺さぶられ、疑われ、失墜したり、虚構化したとはいえ、とくにモダンのスタイルを力強く推進した資本主義をはじめ、それを基盤とした産業システムやその背後にあった無垢な科学主義、科学技術信仰はそのほとんどが生き残りつづけており、近代に対する信念は基底的なところでは堅固に保たれている。

確かに外見上の多様が般化し、とりどりの消費者中心の視座がふるまわれ「お客様」だらけの付加価値に踊る顧客満足のなかでは、泰然として生活世界の植民地化¹⁾が侵攻しつづけている。その意味ではモダンの発展形態ないし帰着したところとしてのポストモダン状況という解釈は的を射ている。企業間競争を生活空間の劇場化として持ち込み、新商品開発から店舗展開、果ては種々の偽装工作あばきにとりかかるとしてそれらを半ば参加型のプロモーションイベントに仕立てながら、その BGM のセールスに群がるオペラ的めまいのうちに結果的には万事をシ

ステムに取り込んでいる。つまり、わたしたちは相も変わらず現実この大がかりに構築した近代の枠組みのなかにおいてほぼ予定されたとおり、しかも生真面目なまでに教化的に動きつづけている。

他方、本稿では別の意味でもポストモダンということばを使う、それは端的に近代における信念、価値観を根底から問い直し、その壁崩しや乗り越えた先に見えだす状況のことを指す。こちらはわたしたちの足下であって、この先にひろがる岐路のひとつとしてある。まだ見えない先ゆえに、名づけられずとりあえず呼ぶところの近代以降である。この岐路のかたちは左右分岐というよりも、上りと下りの坂道としてあり、あえて積極的な選択をしないかぎりはいま戯れているモダンのなかのポストモダン状況でこの先も踊りながら下り坂へと滑り込むことになりそうである。その方向にみえるイニシアティヴはせいぜい懐かしきお立ち台で羽扇子を振ってバブルの泡だてに狂喜する彼女の姿であろう。つまりはバブルのときに夢見た恰好ばかりの諸々への執着である。

畢竟、ここで述べられるふたつのポストモダンは同じことばでありながら、その性格はおおきく異なっているのだが、それだけにそこに描かれうる構想（イニシアティヴ）にはなお一層の隔たりが生まれることになる。以下では、同じポストモダンの構想がこの岐路の選択によってどのように異なる性質を生みだすことになるのか、その差異の輪郭を描きだすことにしたい。

モダンの素描 — ポストモダンへの契機

すでに建築の世界でポストモダンを語る動勢は半世紀前ころに近代建築への反省として生活世界への視座の回帰というところからはじまり（Hudnut,1949）、20世紀後半からは近代建築様式に対するより直接的な対抗価値として言説（Jencks,1977）やP.Johnson、M.Graves、磯崎新らをはじめとする仕事をとおして数多くの具現化をみた。それはひとことでいえば、19世紀半ばのPaxtonのクリスタルパレス²²を淵源にして20世紀に花開いた近代建築へのアンチテーゼとしてなされた。モダン建築は鉄とガラスとコンクリートによって直線的に屹立し、過去と背景を断絶して主体化し、機能と合理性、インターナショナルスタイルを高らかに謳った。それに対し、その各所にありうるかぎりの差異とあそびを持ち込み、歴史と周囲への目配りによる時空的な接続や参照をおこなって多元的、多様な広がりとながりの可能性を示す運動が生まれたのである。

そこで抵抗のひとつの焦点となった合理性、つまり〈合〉理性の地平を見定める動きはKantをひきついで哲学・思想のなかでは19世紀末に果たされていた。たとえばSchopenhauerはLeibnizに結晶化された表象的なオプティミズムを現実直視によって逆転させ、悟性のかかわる表象としての世界の基底に意志をとらえた。そのながれをついだFreudは世界の裾野を無意識という未知の領野に広げた。精神分析学がそこで見たものは、もともとは快としてあったものが頭をもたげるところを、現実を見据えた自我が押し戻すために次第に思いが遂げられず不快の源泉に転化していく様子であった。

こうして人々の総体としての社会に不快が蓄積し、そのつきあいに抗するための力の開発が

ますます近代の重要課題になった。もともと近代の先駆けとして17世紀、F.Baconはそれを「自然」としてとらえた。むろん自然は豊かで大いなる恵みの源である。しかしその一方でそれは制御しがたいエネルギーを宿し、ときに一瞬にしてあらゆるものをひっくり返し、多くの命を呑み込む。しかし、Baconは人間には理知があり、それによって人類の領土は広がり「自然」は制御できると語った。ただ、その領土とは意識的理性の世界であり、征服対象は語義のうへではわたしたちの外部のそれを指しながら、実際は人間自身の内部に抱えるアンビバレントな力と重なっていた。どちらにせよそれを征する近代の知はKepler、Galilei、Descartes、Newtonと連なる科学革命の流れをくんで輪郭をあらわす。たとえば、Galileiは「自然」を御するひとつの方略として彼のいう物体における第二性質を排除し、主観的感覚を科学の知にとって無視しうるものとする客観視というスコープをもたらした。肌感覚で自然に包み込まれている自己は鎧をまとった。それは制御というよりも自然の離断、外部化であった。

つづくDescartesも追い打ちをかけた。彼は自然を物質の延長と運動のみによってとらえて無機化しうることを強調し、Galileiを支持しながら、その観点を小宇宙にも適用した。果たされた科学革命は新しいオルガノンとして科学技術に結晶化され、産業革命を導き推進した。近代はその機械化によって補綴されたシステムによる新しいメガマシン(Mumford,1966)による力の開発を背景に、大いなる物語によって忌まわしき不快の対象を相対化する作業で尽くされた。Mumfordのいうメガマシンとは古代王権のもっていた大規模土木工事を調達する仕組みに由来する。それは人々を部品化し体系化した見えない機械であり、たとえばそれが一定の企図のもとで高度に組織化された集団による仕事に利用されれば労働機械となるし、強制と破壊に用いられれば軍事機械となる。それはむろんメタファーとしての機械であったが、20世紀にはそれが次々と本物の機械に補綴されて、システム化しサイバネティックスを経由して事実上のサイバーオーガニズムを成立せしめた。

ここで補綴(prosthesis)について若干補足しておこう。もともと補綴は人類の成立にとって不可欠なもの(道具・装具)と解釈できるが、現代にいたっては過剰をきわめている。たとえば、現代人は顔面には眼鏡をはじめ各種化学物質からなる仮面をまとっているし、口を開けば金銀、プラスチックが埋め込まれている。衣服はおそらく気候への対処として毛皮や布きれを身にあてたことから始まったのだろうが、やがて個人的な差異化を図る差異、つまり情報をもたらす補綴装具となった。軟弱な裸の身ひとつを孔雀のように、あるいはライオンやガンダムのように変身させる魔術である。

同様に、識別子としての氏名には制度により構成された通標としての肩書きを施し、この補綴の象徴性をめぐって血眼になる。羨望と嫉妬、人類の闘争の歴史はほとんどは、その脆弱な裸の心身に対する、一歩退いてみれば実に滑稽な劣等感に由来した補償をめぐる涙ぐましい争いで綴られてきた。確かにNietzscheのいうとおり、これほど一見、謙虚で恭順かつ善良な大多数で構成されている動物種はほかにありそうにない。そのヴァルネラブルな微笑みこそルサンチマン³という厄介なこころの補綴である。だから人間をめぐるあらゆる悲劇は本質的には、かなしい喜劇ということなのかもしれない。

どれほど文明が発達しようとも、取り繕いがさまざまなかたちをとって、あらゆる局面で回復されていることをみれば、そこに人間存在についての一片の真理があるようにみえてくる。

それだけにその補綴が観念の水準で果てしなく増幅していけば、ほどなく理想やあこがれという大きな物語にむけて一気に展開しがちになる。近代史は科学と技術への厚き信奉と保護に支えられてきた。それは価値自由な世界で無邪気に見出されたことがらにお役立ちの価値を継ぎはぐように技術開発が接続することでもたらされた新しい機械や制度的機構を動力、推力、武力、威力などの力へと転用していくメガメカニカルなメタ技術の追求としてとらえることができる。それらの力はいずれも、もともとは人間の身体に微弱に備わるものであるが、どれもが外部的に機械や象徴体系によって補綴され著しく増幅した。空想科学的に表現すればそれはまさにサイボーグへの道である、だが、そのカリカチュアは見事に転倒し、まともな下支えとなつたたとえば帝国へと向かうグロテスクな構想にも化けた。このことは20世紀の歴史の表舞台を振り返ればあきらかである⁷⁴。

大きな物語の展開 — 表象による間接構想

近代の全局面は神的権威と出生のしほりから「解放」され「自由」を得た人たちが産業「革命」により力を得て人類の普遍的価値にむけて進歩していくという大きな物語(Lyotard, 1979)に支えられてきた。そうした物語は、まずわたしたちの「表象としての世界」の時空に展開された。そこにはめくるめく想像で織りなされたかたちや色が描出され、継いで設計の線へとカラス口が降ろされた。デザインは同時に設計であり、図面を立体化する資料が調達され、大いなる形相のもとで組みあげられていった。近代後期にはメディアテクノロジーが表象の世界を視聴覚的にとりまわし、映画によるパフォーマンスの複製再生やアニメーションが表象の自走と拡張をうながして、間接的な構想の展開を軽やかに推進していった。

ここで表象による間接的な構想とは、あたまのなかに描かれた表象に対する反復拡張と再帰による増幅の操作を経て、適宜それを夢の実現としてかたちにし、外へ表出する作用を指している(半田, 2002)。この表象の拡張増幅過程では種々の欲望がひきつけられ、肥大化、あるいはデーモン化に向かいがちになる。しばしばそれはファウストの野望へと膨らみ、テクノロジーを介し機械と情報の手だてによってわたしたちの実生活へ投機されることになる。それは表面的には夢を現実化する魔術だが、背後では同時に覇権的な力への欲望が渦巻きがちである。また、その拡張増幅機構は近代社会を下支えした資本主義がもつ拡大再生産の様式、市場経済が宿す競争原理に見事に適合する。かのMarxの憂慮は資本主義の基盤にあるモノをめぐる階級形成にあった。だが、それが無産者の革命的な憤りへと現実化しなかった背景には、モノによらずしてコトとしての表象が留まることなく拡大し共有されることで、大方が仮想的ユートピアにプチブル意識をもって生きることができたことによるといえよう。社会主義桃源郷からすれば予想外であった結末は、広漠たるまどろみのうちに微笑みを誘う表象の作用によって達成された。それは豊かなモノに囲まれた映像がマスメディアを介して絶え間なくお茶の間に供給され、常に先々への表象がイニシアティブをとることで遂行されえたのである。

表象に表象がつながり、ウイルスのように伝播し、あるいは自己言及により雪だるまのように増幅していく表象は、その初発にあった主体の意思を易々と超えて自走していく。そこにまた間接性の謂われがあり、意味が意味に連鎖しながらイメージのシステムの増殖が果たされ

ていく。ここで人はマネジメントの役割に任ずるとしても実際は事後的に制御の物語を語ることが多く、いつの間にか自己組織化してゆく表象のあとを追いかける付き人になっていたりする。

マスメディアが担う間接的な表象はわかりやすい例である。その仮構性、空想性、物語性は現実世界というわたしたちの表象とシームレスに接続する。「小説のなかのお話」は映画化され、さらには商品告知や報道と共にお茶の間へとつながっている。その諸々は次第に過去にあった出来事の記憶として虚も実もその境を少しずつ溶かして入り交じってゆく。テレビジョンのビジョンは遠くにある世界を覗く目だが、その遠方は限りなき時空の果てにまで達し、無可有の里や禁断の園、あるいは黄泉の国をも一望し、立ち入り、その音さえも届けてしまう。その光景は個々人の知覚につながり、知らぬ間に個人の視聴覚は主体性の削がれたシステムの視聴覚に接合されている。確かに見ているのはこのわたしであるのに、その視覚はわたしの知らない誰かのものであり、しかもその光景はわたしの知らないシステムによる選定を受けている。わたしの存在と実存のあいだに亀裂が走る。

このシステムの他者の視覚は理性的に自己の知覚として構成された内部の視覚であり、それゆえに末梢からの感覚に対してトップダウンの規制や修正を加え、容易に錯覚をもたらしがちである。しかも、これはほとんど善悪の価値づけが付与された正当的で文化的な学習として刷り込まれる。なかでも理性は科学を根城にして客観というレンズをとおして真偽の明確な分別に直進してきた。そのためには啓示の光ではなく、自然の光により照らされたものだけをみつけ、疑わしきものにはかかわらないという態度を称揚したが、その操作には確かに逃げがあった。自然の光だけを透過するきわめてメカニカルな眼鏡で不可視にしたものは、まさにあまりにも反動形成的だが、自然そのものだったからである。

そのまやかしをかき消すために動員された不安や混沌は表象構想によって描かれた力とメディア世界にむけて昇華されていった。その欲望の発露として表象に媒介されて間接的に描かれた構想は開発と成長、あるいは夢の名のもとに生活世界を整序し、山野を切り崩し、川をせき止め、海を埋め立てた。闘争心はかつて動乱、闘争、戦乱、戦争へと直接的に火が付けられたが、それを押さえ込んだのちには経営や事業の「戦略」、あるいは進学受験をめぐる「戦争」のなかへと代替的に転移されていった。映像の世界で飽くことなく描かれ続ける悪夢と悲劇の背後には、商業文化がそれを成立させていることがなよりの証であるように、人々のカタルシスがある。お茶の間にサスペンスを引き込み、人殺し周辺のありとあらゆる悪事と不幸を目の当たりにしたがるのは、三度の食事と同列に絶えず吹きあがる欲望を解消せざるをえない事情がある。見事にも理性的な見識として平和を語るころの闇の奥には、沸々とわきあがる力をねじ伏せるための過剰なまでの不安と恐怖が間断なく備給される必要があった。

モダン — システムによる凱歌

まとめよう。近代においてわたしたちは科学の名の下に論理実証的な真理の探究を目指した。その道程で社会を席卷したのは実用とか応用として産業を介し現実には展開されるテクノロジーに支援された合理主義であった。その結果としてたどりついたモダンのフィナーレとしてのポストモダン、つまり晩期モダンは夢の作業の具現化で尽くされた。理性はその心地よい

達成感、欲望の満足を制度、規則、機械によるシステムを介して制御しながら果たしてきた。それはまさに Bacon 以来の知による大革命にちがいがなかった。理性は内奥にある自由奔放にすぎる力に蓋をすることによって、まさに近代の夜明けにあった蒸気機関のごとき圧力を巧みに利用した。その果てなく産み出そうとする欲望を押さえつけることで本来の快を不快に転移し、変身させた不快に対して絶えず不安や恐怖、危機感を駆りたてた。システムの構築はその制圧手段であり、力による制御を正当化する。身体には機械、精神には法や制度が補綴され、社会の全面が家父長的でわかりやすい論理と表象で張り巡らされていった。

そのわかりやすさは人の理性に訴えかける単純素朴なものであったが、否定的には粗野で野暮に崩れた。たとえば、近代晩期にはマスメディアの発達で、悪事の物語化とそれに対する集団制裁という構造が、退屈で卑屈な日常に刺激をもたらす娯楽として組み立てられるようになった。これは実に単純なことにモダンスタイルの魔女狩りという集団ヒステリーの反復である。このスケープゴートは内なる恐怖の対象に対する祓いであると同時に築かれたシステムの必要性や有効性を確認する陰湿で軽薄な悪戯であった。このモダン晩期の状況は合理性を貫徹した現実世界と理性的には理解不能な夢幻世界というふたつの表象のモードにおいて境界を融解させながら生じてきている。その結果、夢幻は彼岸から此岸へ降り、現実には漫画チックに劇場化する。素朴にすぎる論理が肩で風を切って通りすぎ、ものごとの本質に迫る忍耐をもたず、わかりやすさに呼応して大騒ぎする。だから、現実表象における集団制裁はたとえば些細でも明示的な暴力に対して血を見ぬナイフを振りまわしながらシステムの暴力を行使して貧相な快感を得る。かなり粗末な道徳観にもとづく正義の刀の振りまわしである。だが、そうした見聞よりも気になるのは 20 世紀末に向かいこのシステムの暴挙の背後にマトリクス影がちらつくようになったことである⁷⁵。

1990 年代になって急激に存在感を増した環境や自然といった概念はシステムの制御の対象として格好の不安と危機感をもたらす重い蓋として機能してきている。だが、これらの観念を強く意識することは原理的には不快なほど魅惑に満ちた内なる力に対するホメオパシー (homeopathy)、すなわち同毒療法であるから、それまでの造られた恐怖とは異なる効力を示してきた。つまり、押し込めた力から抽出した成分を社会の表面に散布したことで、システムはいたるところで機能不調をおこしはじめる。典型的には一度は無視したはずの沈黙の春に光を当てたことで、無垢に猛進する力の単純さが茶化されはじめる。仁義なき戦いよりもその妻たちの戦いの方がずっと華があり、終わりなき欲望の深さに満ちている。ここにおいてシステムはもはや欲望の道具にすぎず、衝突の渦に吸いこまれ根こぎにされつつある。

コミュニケーションの様式もまた、話しことばの身体性が切り離され、発せられた主体がフィクショナルな主人公に置換された書きことばの次元で終始するようになった。むろんこれも片時も離さず「その手」に握りしめられた現代テクノロジーの結晶としての小機械とメガシステムが介在して成立した補綴的な間接構想のもとで実現されたものであった。だが、これにより結果的にはおどましき魅惑が社会のコミュニケーション網に湧出し、たちまちシステムの編み目に浸潤してしまった。男言葉は浸食され、表象のうえではシステムにとっての潤滑油であったものが、現実的にはあらゆるところでショートや酸化を引き起こすマトリクス・スライムとしてうごめいている。

モダン晩期のポストモダンとして — 絡め取られたシステムからの離脱

モダン晩期としてのポストモダン状況は確かに Eagleton (1986) が指摘するように、モダンが謳いあげた大きな物語を相対化することでニヒリズムに陥り、結果的にはもっともモダンな消費文化のなかに取り込まれている。それは象徴的には排気ガスの吹き付けるオープンテラスで多国籍的イタリアンコーヒーをすすりながら現代を批評している完遂された資本主義の使徒の姿に映し出されている。

したがって、ポストモダンをモダンが終焉し、ある画然とした変化を背景にして訪れた状況とみるならば、そこにはべつの光景が広がっているはずである。少なくとも上にみるような景観が21世紀初頭の日本のこじやれた街のそれに重なるとすれば、それとは別のこの先の社会の姿はどのような構想のもとにひらかれるのだろうか。もしその構想が大いなる夢とイメージネーションへと広がり、希望に満ちた彩りで描かれるとすれば、それがどれだけ光り輝くしあわせをイメージしていても、わたしたちはふたたび前世紀の晩期に歩んだ道を辿ることになる。またしてもあの組織的愚挙の再現を反復強迫的に批判をしつつ、現実にはそれを虚無的に受け入れることに墮すだろう。

では、その近代にほんとうの別れを告げ、まだ見ぬポストの界域へと至る条件は何か。まず、近代に人類が築きあげた成果や牙城はとてつもなく大きいから、それを乗り越えるという課題はそれに輪をかけて強い意志や力が求められるだろう。いまのようではなく、よりしあわせに生きたいと願い、そのためにあらたなかたちをつくらうとする意志の強さである。しかし、そこに求められる強靱さとその強さを鍛える過程に要する信念を勘案すると、その志向がわずかにずれただけで、その力はオウムやタリバンのような過激にも転じよう。近代の機構への体当たりを仕掛ける迷妄も引き起こしかねない。近代が築きあげたシステムの巨壁は高く堅いので、真つ向からの対峙はヒステリックな神経症と自爆的な終末観を誘いやすい。

振り返ってみれば、この近代において人類がその堅固なシステムを構築してきた背後にはいつも強い意志があった。この自己の覚醒こそ近代以降、啓蒙がもたらした正負両価を相伴う産物であった。それ以前、この力を封じていたのは宗教であった。個人的な意志はそれに十分覚醒する以前に原罪としてあらかじめ宗教的に封印されたり、非行非善の他力によりて今生の延長に開花されるものと論されていた。しかし、Descartes がすべての人に公平に分与されている良識に言及し、Kant が悟性を使う勇気をもと鼓舞し、あるいは福沢諭吉が至重の文明の精神とした人民独立の気力を語って啓蒙の道を歩んだ近代は、自己確立への意志が目覚め、とりあえず自他未分化の状態からの脱出が果たされてきたわけである。

だがその結果をみれば、実に他律的にして不自由に満ちた社会ができてしまった。原因のひとつは中世から近世を支配した宗教的呪縛が産業システムによる支配と科学信仰という別の魔力によって見事に置き換わったことにあった。それが実になめらかに移行したのはほとんどの宗教において大衆が依拠していた他力本願が新たな権威信仰においても保障され、それに加えてそこには法華、日蓮的な特性をもって事と次第によっては欲望と好奇心の現世における充

足さえも夢見させるものがあつたからである。Durkheim (1893) は工業的分業が道徳的個人主義と連携するとみたが、実際に寄り添ったのは分業システムへの道徳的集団主義であつた。Weber (1920) が読み込んだプロテスタント的倫理と資本主義ないし官僚システムとの親和性はいうまでもなく、福沢 (1880) も学問をすすめたが、それは人はみな生まれは平等である。ゆえにすでに文字知る者は学べば夢をその手にできる、いわんや文字知らぬ者をやという教えであり、このかぎりでは浄土[新]宗の教義とさえいえた。結局のところ、近代で果たされた啓蒙は自分の頭でよく考えて、この新しき導きにしがえという他律と支配のすすめであり、名を変えてそれを人々はシステムとマネジメントと呼び、いかにもありがたく受容したのである。

しかし、誤算があつた。システム、体系はまさに無機的、理念的に全体の表象を映し出すものであるから、その全体像があらわな現実の姿と相似していなければ、たちまち歪んだ姿が目につき、不完全さの指摘を免れえなくなる。20世紀後半、世界大戦というもつぱらシステム片側が自己を語り尽くした時代が終わり、そののちに表面化したことは、その片手落ちのシステムに対する物言いであつた。だが、それは蓋をしたはずの始原からの力の湧出にほかならず、システムは均衡的でまともなかたちに向かうかの様相を呈しながら、実際のところはマトリクスによって絡め取られてゆくプロセスにほかならなかつた。システムもルールもその出生の由縁を忘れ、かつて Kant (1784) が「奇妙なこと」と呼んだとおりに、すすんで足かせを再装着していったのである。

こうしてたどりついたモダン晩期をやり過ごすのではなく、乗り越えてポストの領域へと至るとすれば、もはや湧出し絡まれたおぞましき魅惑に対する抵抗は徒勞でしかないといえよう。かつて Deleuze & Guattari (1972) は欲望のかかわる諸々をすべてメタルで置き換えて、その源泉も末梢もことごとく「機械」化する試みに挑んだ。それはメカニカルエイジのシステム思考が生命現象の合理的解釈を現実存在そのものと錯覚していく片側論理のゆきついた先を思わせる仕事であつた。しかし、Irigaray (1977) は檄を飛ばす。「わたしたちの間じゃ、《硬いもの》は幅をきかせたりしない。わたしたちは自分の体の輪郭をよく知っているから、だから、流動性が好きなんだわ。わたしたちの密度は、断定的な調子や厳格さはいらぬ。わたしたちの欲望が屍のようなものに行き着くことはない」。

それから四半世紀が経ち、すでにわたしたちの社会の状況に結果はあらわとなっている。改革や改造などというものはすでに腐食したサイボーグにあつてはまやかしの免疫抑制でしかなく腐敗はなおいつそう進行する。しかし、ここで選ぶ道は破壊と殲滅とは別様にあつてほしい。その願いを何よりもたいせつにするとすれば、もはや残された道はその湿りきつたシステムもろとも打ち捨てて、彼方へとむかうことしかないだろう。たとえば、それは近代の象徴としてあるシステムに差し向けられるタナトスに発動され、さらにその欲動から解脱して、枯れかじけた荒野に向けて疾走するひえびえとした生命の松明に標された構想として示顕される。

むろんすべてを呑み込もうとする誘惑の力は強烈である。だが、そこから脱するために、安易に表象に依存し間接構想の夢を描くならその路は港への回帰である。補綴にはしり、恰好をつけ、瘦せた知による理解を示すなら元の木阿弥である。もとはといえば、制度や体系としてのシステムが片側みの張りぼてであつたことが問題で、そこがつけ込まれた。開かれ、共有

されうる代理表象がまやかして通じるわけはなかった。近代晩期はそのあまりにも明白な不備に対するわかりやすい改善のプロセスであった。しかし、その果てに整序されたシステムに自己のアイデンティティを求め余地はなく、ことごとくは呑み込まれてしまう。だからこそその丸ごとを棄却し、あらたなるフロンティアにむけて、ばさらにイニシアティブをとっていく道が選ばれうるのである⁶。

テクノロジーや制度で支えられた補綴的なシステムのうえにたつ合理性からの離脱、これらを後退とか単なる放棄ということではなく、不可不の対立の緊張を揚棄してあたらしい次元へ進むプロセスにするには、近代を支えた再帰的表象にもとづく間接構想とは根本的に性質の異なる構想が求められる。その別種の構想を半田(2002)は間接構想に対して直接構想という概念において描いている。以下ではそれをここで述べたポストモダンという次元にそくしてみよう。

そのポストモダンにおける直接構想とは何か

まず、直接構想について簡単にまとめておこう。この構想では間接構想のように、表象に表象を描き重ねて生成される再帰的なイメージ増幅に対しては意識的にこれを回避し、可能なかぎりの表象無媒介を志向する。むろん、わたしたちの心身活動は知覚はもとより記憶や思考においても、表象から離れてすすむことはできない。表象の性質については主として認知科学の分野からさまざまな考え方が提起されてきた(e.g., Keijzer & Keijzer, 2001; Roth & Bruce, 1995)が、世界が表象としてあることは多くの人が合意しているところである。ただ、その表象の世界を仮に一次表象の次元とするならば、そこから二次、三次と表象の連鎖、膨満に進むのではなく、可能なかぎり一次表象の次元にとどまりつづけ、構想者自身の私的言語に相当するもの⁷がふつうのことばを典型とする対象と積極的な意味で不離である状況を求めつづけることに「直接」の主意がある。

少なくとも経験科学における客観の眼差しは、理念的には普遍的な真理に向けて注がれる。実際のところ、それは多数の目による代表値におちつくから、その集合が理想とする正規性からずれることを当然とする現実にあつては、むろん大多数にとっては誰か知らぬ他者の眼差しとなる。その未知の人の視座で構想されるものごとは、無機的で無責任になりがちである。その結果、現実的にはその中心点からすれば相対的に周縁に生きている大多数の人たちの生活世界からはほど遠いものごとが結果していくことになる。

これに対して、直接構想の眼差しはその名称にあらわれているとおり、つねに構想者自身に定位している。構想者のもとを離れて客体化された構想それ自体の眼差しは遮られ、構想と構想する者との関係は不即不離にあつてそこからの視野が広がる。その意味ではそこに映った眺めそのままを普遍化して他者と共有することは端から諦念のなかにある。むろんそれは体系への従属と必然的な整序、断種、骨抜きからの積極的な回避としてある。ゆえに直接構想は媒介物に託された過去ではなく、構想者自身がイニシエーターとしてその差異的な実際行為に現在進行のかたちであられ出ることになる。ここに直接構想は語られたり、描かれたりした「もの」ではなく、語られ、描かれている「こと」その行為となる。それゆえにこの構想は人

の身を超越した無機の対象が独り歩きし、湧き雲のごとく増幅することはない。むしろ異質性をもって成立する構想者自身の生命性とともにあるがゆえに、唯一者的な主体への同一を粉碎する多数化にむけての生命力を宿している。

直接構想で描かれるかたちや動きはわたしたちの身の丈にある。ただし、このサイズやスパンの謂いは清貧といった価値意識にもとづくものではなく、ひとえに花実相応にして風雅のことをいいあらわしている⁸。その描かれることがらは直接に対象を観ることと、その対象をつくりだすことの連続的な循環のなかにある。対象から写し取られた表象、つまり表象の表象に対する描画ではなく、同じ表象としての限界をもつとしても、いわゆる表象としての世界に対する直接行為の発露となる。ここに直接構想の実存的性格があらわれるわけだが、この点について間接構想との比較をとおしてしまし説明を加えよう。

直接構想の実存的性質

表象を媒介する間接構想の場合、表象の存在は代理であることが自覚的に認識されている。そのためそれを実存として認める契機は乏しくなる。とりわけ単一的なシステムの表象体系にのっとった正統的言語やマスメディア的に共約可能なそれは全面的に他の誰かのものごとである。ここに存在と実存の分離というまさに近代の疎外の問題がつきまとうことになる。端的に言えば、いかなる構想もどれほどそれがとてつもなく意味あるものとして理解できたとしても、代理表象のうちにあつては実存的不安を孕むものとなる。具体的には個体の身体感覚にそわない、あるいはもう少しいえば肌感覚から遊離したものとして感受される。実際にはその構想に沿ったものごとの成果は見事に表象世界のうちにあつては、あたかも映画のような、あるいはいつか夢で見たような光景や行為の実現となるかもしれない。だが、そうであればこそわたしたちはその唯一性に決して満足することなく、それが傑作であればなお一層、つぎの傑作を求める移り気をほどなく発揮することになる。その存在がいくら知覚のまえにあらわであつて、手を差しだせば触れことができるありありとした現物としてあつても、それがすでに生活世界の身体感覚から切り離された表象として夢と緇い交ぜのなかであらわれているために、触れた手はすでに他者のよそよそしい手となつていて実存的な意味を感得できないのである。

その構想が具現化された場所では他者とともにいてもその確かな存在はすべてが軽く、漂泊のなかにある。その時空はまさに構成された表象としてあるために、ゆっくりとくつろぐことなど、それもまた夢としてあつただけで実際にはできない。まるでうっかり最新モードの衣服をブティックで纏ったときのような違和感がつきまとう。それでも人間の知覚の順応力はきわめて高く、たとえ逆転眼鏡をつけたとしてもやがては難なく暮らせるようになるほどだから、しばらくすればずれた感覚は消えてゆくと期待できる。だが、存在は実存的な意味を追い求めるよりも早くたやすく、自己を切り裂き、もうひとりの自分である精神はつぎの表象を求めてさすらいだし、残されたもうひとりの身体のある場所は不完全な仮りそめの表象として了解されることになる。

これに対して直接構想では構想の存在がもつ実存的な意味が問われつづける。言い換えれば、この構想では描かれるイメージの認識やその存在にかかわる実際行為を含んだプロセス、つねにいまこの状況的制約のなかで現前していることがすべてになる。だから、この構想は

認識としてのイマジネーションでも存在としてのデザインでもなく、まったくの行為としてのイニシアティブということになる。ここに陽明学からことばを援用できる。すなわち、直接構想の過程においてその対象に向かうところの働きを適切に発揮するにあたり、構想者はその良知、すなわち現在の判断力を錬磨発揚することがまさに構想そのものに組み込まれる。それはおのずと知行が合一した過程のなかで、いまこのアクチュアルな存在を指すことになる⁹⁾。

この直接構想がもつ実存的性質にとって過去はない。かつてどうであったか、なにをなしたかに意味があるとすれば、それはいま現在に生きられるかぎりのそれであり、すでに干からびた経験の記録など私的な記念写真にすぎず構想の射程にはとどかない。だが、表象媒介の落とし穴に足を踏み入れるなら、そこではそうした標本的なものが威力を掲げて通用、濫用されがちになる。構想は現在の直接的な生よりも過去の遺物に惑わされ足をすくわれてしまう。

同時に直接構想がもつ実存的性質にとって未来に投げられる夢も誤魔化しの作り話ではない。それは基本的に空想であり、まどろみのなかの気晴らし以上のものではない。現実存在の状況的制約を表象に照らして補足する方便として未来の予定や計画や予想図が持ちだされる。存在の確かさの一方で実存的な危うさを感じられるとき、人は未来に確かな同一性や帰着点を投射することでその不安を合理化しようとする。ゆえにそれは基本的になだめであり、瞞着である。その幻惑に「いまここ」の意味を希釈させれば、ふたたび再帰的な表象増幅の助けに手を差し出すことになる。

直接構想の認識特性

永遠にあるもの、あるいは普遍的で客観的な真実を見いだすためにありのままを曇りなき目でとらえようとする観察や観測は科学的態度の基本である。そもそもそれが成り立ちうることなのかという基本的問題は態度つまり姿勢のことであるという含みをもって救いにできる。しかしそのことを前提に表現するなら、直接構想が対象を観る目はあえて盲目的であるということになる。これは視覚に対するゆるぎなき信頼と依存を断ちきるための換喩である。視覚への偏倚がありがちなところにおいて、あえて目を閉じる認識である。この一見の非常識が根源的「常識」に由来することは直接構想で認識基盤となる感覚がいかなる個別の特殊感覚でもなく共通感覚 (common sense) におかれていることによる。

この Aristotle 的な意味での共通感覚によって磨かれる実践的なセンサーを考えれば、近代を切りひらいた Descartes (1637) が万人に公平に分与されているものと語った良識が浮上する。ただし、このことばも常識的な意味に解かれてしまうとここで捉える意が生きてこない。ゆえに彼が記した bon sens をわたしたちに幾分でも馴染みのある英語読みにしてグッドセンスとすれば、ここでの解釈に少し接近する。その意味を Bergson (1895) がつぎのように語っている。「良識 (グッドセンス) は実際生活のなかにおいて、天才が科学や芸術のなかにおいてあるところのもの」そして「絶えず目ざめた能動性を、常に新たな状況への常に新たにされる適応を要求する」ものであり、さらなる要求として「われわれが抱いていた意見やわれわれが用意していた解答を時につらいことがあるにしても犠牲にすること」をもとめるのであり、その意味で「学ぶ勇気を伴った自覚した無知」だということである。そのようにみれば、これこそ万人に公平に分け与えられているもの、ただそれに気づいていないだけだと

Descartes は語った意味もみえてくる。わたしたちは近代の思潮を支えたデカルト主義は乗り越えて先に進まねばならないが、ルネ・デカルトの思慮には学び直す必要がある。彼の語ったグッドセンスとは Bergson がいうようにいつもあらためて適切であろうとする感覚であり、その最大の敵は型にはまった精神と表象に遠慮なく描かれがちな妄想的構想だからである。

グッドセンスをとおして表象的幻惑とそのペールを限りなく透過する観想をし、その対象にできうるかぎりの身体感覚をもって直接、働きかけることで、いまここにあることを捉えていく。その例として Merleau-Ponty (1964) は画家を引きあいに出し「その身体を世界に貸すことによって、世界を絵に変える」と語る。しかもそれは「彼の眼と彼の手がよく見、よく描くことによって与える以外のいかなる技術」もなしになされていると驚嘆する。そして P.Valéry を引用して画家はその身体を構えていると確認するのだが、これはすぐれた画家がまさに直接構想という綜芸の実践者として活動していることをあらわしている。むろん、ここでこの構想者が世界にその身を投じてよくみている状況は視覚というよりも共通感覚にもとづく観想である。

観想と直接的な実際行為がむすびつくことは古代ギリシアの哲学を出所とする観想 (contemplation) からすれば、キメラのごときヘテロ接合を思わせるかもしれない。だが、その連想を誘うものは地中海の伝統に由来し、有閑階級の非労働的な精神活動と労働者階級の肉体活動としての身体行為を高低の別次元に対置する人の業ともいえる差別的二項観にもとづくものにすぎない。直接的な実践と観想という一見、むすびがたきものにインゲニウム (ingenium) の知 (Vico, 1710) によって共通性を見いだし結びつけるハイブリドーマこそは、実は旧くてあたらしい Plotinus 由来の脱我的でスピリチュアルな直観であり、ここに近代にあらわとなったシステムの統御の隙間から湧出したおぞましき魅惑に囚われた停滞からの脱却にむかう構想線を見いだすことができる。

あくなき産出からの脱出

最後に、産み出しつづけようとする意志からの脱却を主題とするポストモダンの構想という観点に戻って本稿をしめくろう。近代の力は自然、環境、女性、母という底なしの産出力、そのみずからの尻尻を食っても生き延び、すべてを呑み込み産みつづけるウロボロスの脅威に抗する父権的なシステムの威力による封じ込めの拮抗力として現出した。なおそれで足りないところに対しては絶えざる恐怖と冒険と夢による大きな物語を備給して表象的なシンボルをかかげる先導策とそれによる秩序づけに邁進してきた。だが、市民意識の目覚めは自然保護、環境保全、フェミニズム運動、無差別武装テロという地盤そのものの流動化を誘い、築かれた権力の釜戸や摩天楼に瓦解をつきつけた。これらはいずれも家父長的な一元論理に依拠したシステムがその根底に抱えたあきらかにすぎる片側性につけ込まれた異議申し立てであった。だが、いまやこれはそこに動じたシステムの編み目から漏れ出た脅威のマトリクスによる全方位的な呑み込みとしてあらわれ出しており、あきらかにひとつの終焉としてみるができる。

この近代の終わりを告げる動きを受けてこの先に拓かれる道は、たとえばディープエコロジーが示すような蓋を吹き飛ばすおぞましきものの放出のような方途ではなく、それを解脱する方向に見いだされるはずである。そうでなければ始末におえない取り込みのなかで衰弱を

みることになるだろう。母なるものからの脱却として父権的システムの防壁をたてつくす近代の一大事業はすでに破綻した。それへのノスタルジックな固執はもはやマトリクスに抱かれた赤子の泣き声にしかならない。また親を意識する子役割としての家族的依存関係を社会に引きずり込む国家の幻影からも卒業するときがきた。先に引かれた線は真の独立への道を歩む個人として自律し、そのうえでの協働関係を基軸とする事業への構想にある。

むろんそのエンタープライズに向けての構想過程では、福沢が近代のはじめに説いたように、天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず、ゆえに上下の関係はひとえに人が学ぶこといかんにより決まるといった近代教育の信念がまずは解体される必要がある。多くを学ぼうがよく学ぼうが知ったことにはならない。人は学べば学ぶほど知らないことに気づき恥じ入るはずだから、その意味では近代の教育が「学べたシステムでなかった」ことは現実が実証済みである。その学べないやり方では結局、制度的に構成したあれこれの象徴資本を競い、その狭い砦のなかで野暮な威勢をはってみるのが関の山となる。だから、もとよりその程度のわたしたちにはどんなにせよ上だの下だのありえないという社会に生きなおすことから始まらざるをえない。

それはなにもたいそうなことではなく、生きる場が乳臭くなく父権的臭いにむせるシステムの社会でもなく、毎日の生活世界にあって、個々の身体の全面において感知される共通感覚と身体運動の自然な律動において生きることにつぎ。みずからの存在が実存と重なりあい、それゆえに一つひとつの活動が確かなものとしてみずからに返ってくるのが実感できればよいわけである。それにはその事業や生活に描かれる構想が二次的な表象をあいだに挟むことなく寄り添い、マトリクスへの恐怖とその対抗としてのシステムの屹立という果てしない攻防ではなく、そこにみられる分別を捨て、象徴された項をみずからとの関係においても融通無碍にして無分別的に直覚することに鍵があると思われる。

最後に、近代への扉を開きマトリクスからの出帆を果たした Bacon が、それでもまだ十分に自然の内側にいたことを伝えることばと、その行動のことごとくが直接構想のもとにあって真の独立への道を説いた M.K.Gandhi のことばを引いて結びとする。

「人間の心を思い上がらせ膨れさせる蛇に汚染された毒が知識から除かれて、我々が高さをもまた度を超えてをも、知ろうとすることなく、真理を愛のうちに培い育てるように (Bacon,1620) 」

「人間の限界を、神は身体を造って設けた (Gandhi,1910) 」

*1 国家や貨幣やマスメディアによって媒介され、物質的な成果主義を原理とする支配的なシステムが、そのつどの対話的な合意と了解を原理とする「生きられる世界」の領域に侵入、着地し、仕切り、整序と合理化をうたいあげる様を Habermas は近代の病理現象として生活世界の植民地化といいあらわした。

*2 1851年、大英帝国ではじめて開催された万国博覧会でハイドパークに建設された建築物。全長 563 m、幅 124 m、中央頂部の高さ 33 m の鉄とガラスの建築で内部に街路と街区が含まれていた。その工法

と材料選定の合理性は近代建築を先導するものであった。

*3 ヴァルネラブル (vulnerable) 、すなわち他者からの攻撃を受けやすいことで、この性質をヴァルネラビリティと呼んでいる。攻撃を受けやすいのは単に弱いものいじめとして括られる対象がもつ性質のみならず、その対象が一定の集団の平均的な基準や水準を逸脱したり超えたりしていることにもよる。いずれにしても有徴性がヴァルネラブルと裏腹の関係にある。

この背後には集団が明示的ないし暗示的に共有している規範的な基準を正当ないし正統とするなかで、それらを可能性ないし事実として超え出ている性質が見いだされたときに、それに対して抱かれる緊張や反感、反発を動機にして、それを逆転した相対的な良き振る舞いを開示しようとする動機がある。つまり、かなわぬ性質を前にしてそれに負けず劣らぬ量をもった恭順さを示そうとする。ここに Nietzsche の指摘したルサンチマンが備給されている。たとえば、評価しうる方向に超え出たヴァルネラブルな存在に対してふつうの人びとはすり寄り、あげたてまつることを得意とする。だが、それと同じくらいしばしば、そこにわずかな落ち度を発見するや嘲笑やときに憎悪を浴びせて、一気にその座から引きずり降ろすこともする。

*4 20世紀前半、まだ間接構想の猛威が社会の全領域にふるわれる手前において、人間精神におけるロゴスとパトスの統一という観点から構想力に光をあてて考察した三木清 (1939) は語っている。「動物は身体の器官の奴隷であるが、人間は道具を支配しこれによって身体的な欲望の主人となることができ、そしてその「欲望や意志が形になるのでなければ、それは技術の中へ入ることができぬ。かように形となる欲望や意志がまさに構想力である。構想力において主観的なものは形となって主観から抜け出るのである」。この自己からの超越こそ構想力の本性であり、技術の進展とともにその力が課題とも難題ともなってくる。

*5 「マトリクス」は本稿のキーワードのひとつであるが、それだけにここではその意味解釈を支援するような換言はあえて避けた。このテーマは機会をあらためて論じる予定である。

*6 ここでいう「ばさら (婆娑羅)」は単に華美で派手な見栄、勝手気ままな振る舞いというその外見的な意味を指すのではなく、そのかたちのゆえんとしての精神を指している。遠く南北、室町の時代に今様を引き継いでその当時のポストモダンの美をあらわした反体制的気骨や自由への気概がばさらである。これは安土桃山ルネサンスにおけるかぶきにつながり、茶を介してのわびさび、さらには近世の風流韻事による洒脱ないきの精神へとつらなる。

*7 Wittgenstein は私的言語を考察し、その存在を否定したが、ここで私的言語とは主観のたとえほどのものである。

*8 花実相応にして風雅のことを芭蕉『笈の小文』にうかがえば次のとおりである。「風雅におけるもの造化に従ひて四時を友とす。見るところ、花にあらざるといふことなし、思ふところ月にあらざるといふことなし」。この自然との関係性をあらわしながら、彼は「山野海浜の美景に造化の功を見、あるは無依の道者の跡をしたひ、風情の人のまことをうかがふ。なほすみかをさりて器物のねがいなし。空手なれば途中の愁ひもなし」とする。ここに造化にしたがい造化に帰れとは外的自然からの超絶宣言であることが読みとれる。

*9 アクチュアル (actual) であることの意味をリアリティ (reality) との関係において確認しておこう。後者は存在の静態的な特性をもってその実在性を語る。これに対して、前者は他者との関係においてその作用を含んだ動態的なプロセスの現実性を語っている。かのヘラクレイトスは川の水にリアリティを観ることができなかったが、その圧倒的なアクチュアリティに驚嘆した人であったといえよう。

引用文献

- Bacon,F. 1620 *Novum Organum*. 桂寿一訳 1978 『ノウム・オルガヌム』岩波書店.
- Baudrillard, J. 1970 *La Societe de Consommation : ses mythes, ses structures*. Denoel.
今村仁司・塚原史訳 1979 『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店.
- Bell,D. 1973 *The Coming of Post-industrial Society*. Basic Books,, 内田忠夫・嘉治元郎・城塚登・馬場修一・村上泰亮・谷嶋喬四郎訳 1975 『脱工業化社会の到来』ダイヤモンド社.
- Bergson,H.1895 「良識と古典学習」 en *Écrits et Paroles*. Presses Universitaires de France,
1959. 花田圭介・加藤精司訳 1992 『ベルグソン全集 8 小論集 I』白水社に所収.
- Deleuze.G. & Guattari,F. 1972 *L'anti-Oedipe: Capitalisme et schizophrénie*. Les Editions
deminuit, 市倉宏祐訳 1986 『アンチ・オイディプス』河出書房新社.
- Descartes,R. 1637 *Discours de la Méthode*. 谷川多佳子訳 1997 『方法序説』岩波書店.
- Durkheim E. 1893 *De La division du travail social: etude sur l'organisation des societes
superieures*. Paris : Alcan . 井伊玄太郎訳 1989 『社会分業論 (上下)』講談社.
- Eagleton,T. 1996 *The Illusions of Postmodernism*. Blackwell. 森田典正訳 1998 『ポスト
モダニズムの幻想』大月書店.
- 福沢諭吉 1880 『学問のすゝめ』岩波書店.
- Gandhi,M.K. 1910 *Hind Svaraj*. 田中敏雄訳 2001 『真の独立への道』岩波書店.
- Giddens,A. 1990 *The Consequences of Modernity*. Cambridge: Polity Press. 松尾精文・
小幡正敏訳 1993 『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』而立書房.
- Hudnut,J. 1949 *Architecture and the spirit of man*. London : Oxford University Press,,
- Habermas,J. 1985 *Der philosophische Diskurs der Moderne*. Suhrkamp. 三島憲一・轡
田収・
木前利秋・大貫敦子訳 1990 『近代の哲学的ディスクルス (1) (2)』岩波書店
半田智久 2002 「構想概念の射程: 想像のスペクトラムと2つの構想モード」構想研究,1,
16-30.
- Irigaray,L. 1977 *Ce sexe qui n'en est pas un*. Éditions de Minuit. 棚沢直子・小野ゆり子・
中嶋公子訳 1987 『ひとつではない女の性』勁草書房.
- Jameson,F. 1984 *Postmodernism, or the cultural logic of late capitalism*. *New Left
Review*,146,53-92.
- Jencks,C.A. 1977 *The language of post-modern architecture*. New York: Rizzoli.
- Kant,I. 1784 *Beantwortung der Frage: Was Ist Aufklärung*. 篠田英雄訳 1974 『啓蒙とは
何か』岩波書店.
- Keijzer, F.A. & Keijzer, F. 2001 *Representation and Behavior*. MIT Press.
- Liotard,J.F. 1979 *La condition postmoderne*. Éditions de Minuit. 小林康夫訳 1986 『ポ
ストモダンの条件』水声社.
- 松尾芭蕉 1687 『笈の小文』.
- McGuigan,J. 1999 *Modernity and Postmodern Culture*. Open University Press. 村上恭

- 子訳 2000 『モダニティとポストモダン文化』彩流社.
- Merleau-Ponty,M. 1964 L'Oeil et L'Esprit. Gallimard. 滝浦静雄・木田元訳 1966 『眼と精神』みすず書房.
- 三木清 1939 「構想力の論理 第一」、『構想力の論理：三木清著作集第8巻』岩波書店、
- Mumford,L. 1966 The Myth of the machine : Technics & Human Development. Harccurt, Brace & World. 樋口清訳 1971 『機械の神話—技術と人類の発達』河出書房新社
- Mumford,L. 1971 The Pentagon of power : Myth of the machine vol.2. London : Secker and Warburg. 生田勉・木原武一訳 1990 『権力のペンタゴン—機械の神話第二部』河出書房新社.
- Rorty,R.1999 Philosophy and Social Hope. Penguin Books. 須藤訓任・渡辺啓真訳 2002 『リベラル・ユートピアという希望』岩波書店.
- Roth,I. & Bruce, V. 1995 Perception and Representation : Current Issues. Open University Press.
- Vico,G. 1710 De Antiquissima Italarum Sapientia ex Linguae Latinae Originibus Eruenda, Liber Primus sive Metaphysicus. Napoli. 上村忠男訳 1988 『イタリア人の太古の知恵』法政大学出版局.
- Weber,M. 1920 Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus. Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie,Bd.1,17-206. 大塚久雄訳 1989 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店.

2003年1月4日 受稿
2003年2月25日 受理